

24

長野県で新たな 市民活動がスタート

北信、小布施町でキックオフ・シンポジウム開催 東信、子実トウモロコシ栽培による耕畜連携

日本には、自然環境や歴史的つながり、郷土愛、現在の経済圏など地元住民から見ると一体感のある地域が100〜150ほどある。農村が広域連合を形成し住民が一体感をもって、将来の目標を戦略的に選択できる新しい経済圏をスマート・テロワールと呼んでいる。長野県にはスマート・テロワールとなり得る地域が7つある。北信地方はそのひとつだ。

北信、小布施を拠点に活動を開始

「北信スマート・テロワール活動のキックオフ・シンポジウム」が9月3日、小布施町で開催された。今回、北信地方で活動を始めるに当たり、スマート・テロワール協会と小布施まちイノベーションHUB（ハブ）の活動を、2019年度の環境省「地域循環型共生圏づくりプラットフォーム」事業に申請した。将来の地域

の構想と計画を策定すること、計画を推進していく組織をつくること、この事業として採択された。なお、環境省の「地域循環型共生圏」と「スマート・テロワール」は、地域内で食料やエネルギーなどを循環させ、持続可能で自立した地域を目指すことなどの考え方が共通している。

シンポジウムでは、「農業を核とした自立と、分散型農村による共創ネットワーク」をテーマに、協会理事長兼会長の中田康雄がスマート・テロワールの趣旨と全体像を紹介した。講師として招かれたのは、環境省大臣官房環境計画計画官で元長野県副知事の中島恵理氏である。中島氏は、「小布施町における地域循環共生圏づくりへの期待」と題した講演のなかで、小水力発電や太陽光発電、農畜産物の加工、街並みづくりなど、小布施町ではすでに価値のあ

る取り組みがされていると評価した。そして、今後はそれぞれ単一の取り組みを統合的な取り組みに変えるイノベーションによって持続可能な地域づくりをしていくことが重要だという趣旨を伝えた。

会場には、小布施町長をはじめ、小布施まちづくり委員会、小布施町



北信スマート・テロワール活動のキックオフ・シンポジウム



小さな一歩から始まる
新たな経済圏

小布施で北信スマート・テロワールの活動が始まった。これを機に改めて原点を振り返ろう。

現在、日本ではコメ離れが進んでいる。多様な食を楽しむという食生活の大転換が起きているからだ。コメに固執していると、消費者の変化に対応できない。結果的に自給率が下がっていく。現に水田の約3分の1が休耕田になっている。一方、畑作物、特に穀物は世界水準の収量に達していない。スマート・テロワールの原点はこのような農業への問題意識である。「スマート・テロワールが目指すべきは、地域ユニット内の『自給圏』です。つまり、食料は地産地消、住宅（木材）も地産地消、電力も地産地消が原則です。ユニット内の物質循環、産業循環、経済循環が可能な単位といえます。（中略）

地元で栽培した、現在自給率の低い大豆や小麦などの穀物をベースにした加工食品をつくる。同じく自給率の低い子実トウモロコシ

「子実」ともろこし栽培による耕畜連携プロジェクト」研修会を実施した。NPO会員とコメの生産者を対象に、本誌の昆虫則編集長、農機メーカーのスガノ農



（株）角田牧場の蓼科牛



「蓼科牛いっとう」の焼肉



盛川農場でトウモロコシの機械技術体系や乾燥調製を学ぶ視察団。右から盛川周祐氏、農事組合法人飯嶋農園理事の飯島光樹氏、（株）いっとうの角田大徳氏、NPO法人信州まちづくり研究会会長の安江高亮氏、本誌編集長昆吉則。

の住民のほか、長野県行政関係者、先行して東信で活動しているNPO法人の会員らなど、約100人が参席した。今後は「小布施まちづくり委員会」など地域住民が中心となって活動を展開していく。

東信で子実トウモロコシ栽培への取り組みを開始

東信地方で、市民活動を展開してきたNPO法人信州まちづくり研究会が、スマート・テロワールの取り組みとして耕畜連携への第一歩を踏み出した。現在ほとんどを輸入に頼っている飼料用トウモロコシを東信で栽培しようという取り組みだ。

信州まちづくり研究会では7月27日、第4回「東信スマート・テロワール研究会」

機、種子を扱うバイオニアエコサイエンスが講師を務めた。来場者は、水稲作を含めた畑作技術体系のあり方、作物に必要な土づくり、異常気象に負けない汎用田づくり、子実トウモロコシの栽培方法を学んだ。研修会の参加者でNPO会員でもある（株）いっとう代表取締役社長の角田大徳氏が、子実トウモロコシ栽培に名乗りを上げた。大徳氏は、立科町で焼き肉店「蓼科牛いっとう」を経営しており、父の敏明氏は（株）角田牧場を営み牛を肥育している。大徳氏が子実トウモロコシを栽培し、敏明氏が飼料に使用し、堆肥を畑で使用することによって、親子で耕畜連携を図ろうというのだ。

「立科のトウモロコシを食べて育つた蓼科牛を店で提供したい。そうすることで、立科にトウモロコシ生産の取り組みが広がるというのは、とても夢がある話だと思う」。角田大徳氏は、かつて牛舎に隣接する牧草地だった土地を活用し、まずは2020年から0.6haでトウモロコシの栽培しようと準備を始めた。8月27日には、岩手県花巻市で水稲、麦、大豆、子実トウモロコシの生産を手掛ける（有）盛川農場の盛川周祐氏を訪ね、栽培の機械技術体系と、収穫後の乾燥調製や出荷までの技術を学んだ。農場の視察後は、盛川氏らのグループがトウモロコシを出荷している「白金豚」の高源精麦（株）代表取締役社長の高橋誠氏と懇親会を開いて意見を交わした。

を栽培する。その餌で育った肉類を加工し、地元で食す。地元で愛される食べ物ができれば、その地域にしかないオンリーワンの誇りが生まれ、愛着が深まっていきます。私の提案は、地域に立脚し、地域が栄える自給圏IIあらたな経済圏をつくらうという考え方です」（故・松尾雅彦氏の著書『スマート・テロワール』より抜粋）

私は小布施町で畜産と農業と食品加工を連結する壮大な夢に挑戦している若者に出会った。（株）小布施牧場代表の木下荒野氏である。木下氏はジャージー種の牛を放牧型で10頭ほど飼育し、完熟堆肥を還元した農地で、トウモロコシ、牧草、麦などを飼料に使用している。また、牛乳からジェラートとチーズを製造する加工販売業も展開して、牧場の近くに販売所を設け地元の人々に提供している。トウモロコシは牧場の隣地の休耕地を農家から借りて栽培している。牧場の周囲には、ほかにも休耕地が大きく広がっている。木下氏はこれを活用して牧場と畑地を徐々に拡大していこうと意気込んでいる。

まだ始まったばかりの挑戦だがまさにスマート・テロワール実現の第一歩を踏み出しているといえる。こうした若手農家の勇氣ある挑戦に惜しみない拍手を送りたい。